

インドネシアの印象

(1)

吉村泰明

昨年の一〇月末インドネシアのジョクジャカルタでコロンボ会議が開催され、私も日本の代表団の一員としてインドネシアにわかつた。コロンボ会議というのは、東南アジアの経済を開発して、東南アジアに住む人たちの生活程度を向上せしめるための国際会議である。

私はこれまで東南アジアの国々をほとんど旅行したが、インドネシアだけはいまだ行ったことがなかった。それで昨年の米国シアトルの会議で、次回はインドネシアで開催することがきまた時から今度は行けると期待していた。そして幸に今年も代表団の一員に選ばれて期待通りインドネシアに行くことができた。

インドネシアは御存じのようにアジアでは中国、インドにつぐ大国であつて、この国の動向は将来アジアの運命に大きな影響がある。殊にインドネシアはインド、エジプト、ビルマなどとともに社会主義的な政策をとっている国であつて、東西に対する世界の中で、いわゆる中立国として、東西いずれにも加担せず、また東西いずれの国からも注目されてい

ジャカルタまで



コロンボ会議会場
ジョクジャカルタのガジャマダ大学

東京を出発するとき、会議場にあてられたジョクジャカルタまで飛行機を予約しようと思ったが、東京では予約できず、「チャンス・グード」という電報をシンガポールの日本航空の支店から受取った。ホテルからガルーダに電話をかけて翌日

月刊「地理」（古今書院発行）
第5巻第9号（1960年9月号）

のジャカルタ行の飛行機を予約しようとしたが、意外に予約することができなかつた。ガルーダというはインドネシアの紋章「驚々」を意味し、これまでのインドネシアの航空路を独占していたオランダの航空会社KLMを追い出して、これにとつてかわったインドネシア国営の航空会社である。

国際航空の慣習上「チャンス・グード」なら大体まちがいなく予約できると思つたのと、ガルーダが会議出席席者に便宜をはかつてくれるなどを期待していたのと、それにガルーダなどという新米の会社にあまり乗り手はないだろうとあまくみていたのがまちがいであった。

実はインドネシア政府の会議の案内書に、会議出席者はできるだけガルーダを利用してほしい、ガルーダで入国した者はジャカルタのホテル代一泊はフリーであると書いてあった。御承知のように各

国の飛行機会社の客の争奪戦はすさまじいものがあり、インドネシア政府はこの会議の出席者にガルーダを利用させようとするのは当然のことであつた。

私はインドネシア政府ならばにガルーダ航空会社に敬意を表し、かたがたジャ

インデスに泊めてもらえないぞ」と警告されていた。

当時私は山下画伯のいい草ではないが、兵隊の位にして大尉相当官であつたので、剣の帯は残念ながら未だ青色である。赤帯すなわち佐官級以上でないとホテル・デス・インデスには泊めてもらえないのである。米軍占領中、東京の帝国ホテルにはV.I.P.すなわちベリ・インボーラント・ビープルでないと泊れなかつたのと同様でつまらぬ差別待遇である。

戦争中内地では占領地の中でジャワが一番よいといわれていた。そして特にジャカルタのホテル・デス・インデスはすばらしい。そのライス・ターフェルはものすごく豪華版である、という評判があつた。

ライス・ターフェルというのは英語のライステーブルのこと、洋式のホテルで洋食のほかに出しているインドネシア式クムの料理」ということである。それはまず最初にボイイが米飯を運んでくると、次から次へと十数人のボイイが一列に並んで、インドネシアの山海珍味を運んでくる。その中から自分の好きなものを好きなだけ自分の皿にとつて食べる

のを好きなだけ自分の皿にとつて食べる



ホテル前を行く人びと

ルもその後何度も食べたのであるが、ホテルの部屋はわびしく、ホテルの食事は味気ないものであった。そして昔このホテルに泊めてもらえないことを知つて悲哀を感じたと同様に、今度はこのホテルに泊めてもらつて悲哀を味わせられたのである。

昔と今と

インドネシアは現在戒厳令下で、軍人さんがえらく幅をきかしている。それは昔日本軍が占領していた時と同じで、ホテルはほとんどインドネシアの軍人のため占領されている。ジャカルタでは宿舎が非常に不足していて、商社の人ばかりでなく大使館の人たちも宿舎を探すのが一苦労である。

ある大使館員の話によると、こちらに転任して来て家を借りるのに、その前住者とあらかじめ話をつけて真夜中にひっこしをやつたそうである。家がちょっとでも空くことがわかると軍に優先的に微発されてしまうからである。

そんなわけで市内に家をみつけられない軍人が、軍の威力でホテル・デス・インデスの部屋の大部部分に、その家族と

カルタでのホテル代を僨約させてもらうつもりだった。そこで私は、やつきとなつてインドネシア政府招待の会議に出席する日本代表団の一員であり、至急ジョクヤカルタまで行かなければならぬ旨を力説したが、米国の観光団がたくさん乗るのでだめだという一点ばかりの冷い挨拶であった。

これで私の計画はおじやんとなり、シンガポールで二晩も泊まらせられ、ようやくエヤー・インディアでインドネシアにはいることができたが、私の初印象をすっかり悪くしてしまつた。頭にこのような飛行機のことを詳く書いたのは、インドネシアにおいてはすべて事務的能率がきわめて低いということ、もう一つインドネシアでは旅行がきわめて困難であるということをわかつていただくためである。

飛行機は出発まぎわまで一休乗せてもらえるのかもらえないのかさっぱりわからない。これはなにも飛行機にかぎつたことではなく、ホテルでも鉄道でも同様である。インドネシア国内においては事務能率が悪いばかりでなく、すべて軍が優先し、軍の命令ならばいつでも一般客

の案内状にも書いてあつたので、こちらに来る前にインドネシアに最近行つたことのある人達に聞いてみたが、誰も知つている人はいなかつた。そればかりか、ジャカルタではホテル・デス・インデスの新しい名前であつたので安心した。

ホテル・デス・インデスでは私に一つの思い出がある。戦争の末期私は海軍の技師になつてジャワに行くことになつており、結局飛行機も船もなくて行けなかつたのであるが、その時同僚から「ジャカルタでは赤帯でないとホテル・デス・

ホテル・ドタ・インドネシア

の予約はとりけられるからである。

もにはいりこんでいる。したがつて日本の大使館のあつせんでやつと私は部屋がとれたというものの、ホテルはまるで軍人家族のアパートみたいで、まつたくホテルらしくなく、食堂なんかは開放的としている。これではホテルとしての経営がなりたたないのは当然で、建物の手入れはできず、サービスはゆきとどかない。

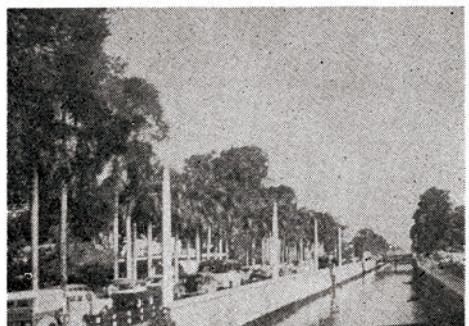
戦後は東南アジアでも一流のホテルはどこでもほとんど冷房装置が完備してい、ホテルにおれば暑さを感じないのが普通であるが、このホテルはジャカルタ唯一の最大ホテルにもかかわらず、冷房どころか、おそらく三〇年以上も使い古した小さな卓上扇風機がゴトゴトとまわりがちに動いているだけである。

泊るところはすべて本館を離れた別棟の二階建で、広い庭と大きな樹木に囲まれ環境はよく、部屋もあるほど大きくなりっぱりで、庭に面して広いベランダがついているが、壁はうすくよごれ、家具調度はすべてガタガタの骨董品である。蚊がいるので部屋の中に金網がはつてあるところがあつて、ベッドはその中におかれたり、風呂にはお湯が出ないので、水をただシャワーか手桶であるだけで

いといふ自尊心と、外国の援助なしにはやつていけないという事実とのジレンマにならむ、新しい独立時代がやつてきた。

ホテル・インデスはホテル・ドタ・インドネシアと名前は変り、インドネシア人の経営するインドネシアのホテルとなつた。しかし経営はなりたたず、建物は荒れはて、外国人に馬鹿にされまいという自意識のみ过剩で、卑屈ではな

い真のサービス精神というものはすこしもみられない。



ジャカルタ中心街の堀割

おそるべきインフレ

ホテルの前は電車通りになつていて、そのむこうにコンクリートの大きなぼりがあり、汚い水が流れている。このほりわりの中での有名なマンデーのんびりやつていてる市民が見られる。マンデーというのは河で水浴すること、日本のように風呂もなく水道の水も自由に使えるところでは、少々水は汚なくてもこのよくな方法で、暑さしのぎと汗やこれ落すのは仕方のないことと思われる。しかしマンデーと同時に衣服の洗濯もし、食器も洗い、しかも同じ場所で大小便をおこない、それが町の真中だというとちよつとおそれいらざるをえない。

ことに人の見えるところで堂々とお尻を丸出しにしてほりわりに向つてうんちをしている光景に現実にぶつかるのは、文明人にとってショッキングなことで、思はず顔をそむげざるをえない。

衛生なことを論じてもはじまらないと思つたが、街に出て目ぼしい店のショーウ

もにはいりこんでいる。したがつて日本の大使館のあつせんでやつと私は部屋がとれたというものの、ホテルはまるで軍人家族のアパートみたいで、まつたくホテルらしくなく、食堂なんかは開放的としている。これではホテルとしての経営がなりたたないのは当然で、建物の手入れはできず、サービスはゆきとどかない。

戦後は東南アジアでも一流のホテルはどこでもほとんど冷房装置が完備してい、ホテルにおれば暑さを感じないのが普通であるが、このホテルはジャカルタ唯一の最大ホテルにもかかわらず、冷房どころか、おそらく三〇年以上も使い古した小さな卓上扇風機がゴトゴトとまわりがちに動いているだけである。

泊るところはすべて本館を離れた別棟の二階建で、広い庭と大きな樹木に囲まれ環境はよく、部屋もあるほど大きくなりっぱりで、庭に面して広いベランダがついているが、壁はうすくよごれ、家具調度はすべてガタガタの骨董品である。蚊がいるので部屋の中に金網がはつてあるところがあつて、ベッドはその中におかれたり、風呂にはお湯が出ないので、水をただシャワーか手桶であるだけで

もにはいりこんでいる。したがつて日本の大使館のあつせんでやつと私は部屋がとれたというものの、ホテルはまるで軍人家族のアパートみたいで、まつたくホテルらしくなく、食堂なんかは開放的としている。これではホテルとしての経営がなりたたないのは当然で、建物の手入れはできず、サービスはゆきとどかない。

はできず、サービスはゆきとどかない。

ある。聞くところによるとインドネシア政府はホテル・デス・インデス Hotel des Indes というオランダ名が氣に入らないで、改名したかつたのであるが、ホテルの食器やテーブル・クロス類に総て HD I というイニシャルがはいついて、改名すればこれを全部新調しなければならないので、おいそれと改名できなかつたそうである。

そこでいろいろ考えてようやくホテル・ドタ・インドネシア Hotel Duta In. Indonesia という名前を考え出して改名した。duta というのはインドネシア語で大使という意味であるから、さしつめアーバサター・ホテルといったところで、これならば HD I のイニシャルはそのまま使えるという寸法である。

しかしこの HD I のイニシャルのはいつた、昔は豪華であったと思われる食器やテーブル・クロス類も、今はや今ではあちこちかけたり、ぼろぼろにすりきれてしまえるという寸法である。

私は午後街を案内してくれるという商社の人を待ちながら、古びたベランダの藤椅子に腰かけて、むし暑い空気をただ

ていて、昔の面影はまったくない。

私は午後街を案内してくれるという商社の人を待ちながら、古びたベランダの藤椅子に腰かけて、むし暑い空気をただ

ブルブルかきまわしているにすぎない扇風機の音を聞いていると、旧蘭領東印度時代、日本占領時代、そして現在の新興独立国インドネシアの時代と三つの時代の対称が、どうやらわかりかけてきたような気がした。

かつてこの部屋のこの椅子に、オランダから来た若い役人や金持の商人が坐り、インドネシア人はジョンゴス（召使い）だ。それはインドネシア人にとつては平和ではあるが無氣力な汚辱にみちた蘭領東印度の遠い昔のことである。

次に白襟の紳帶用の軍服に身をかため、赤帯の剣をガチャツカせながら、あまりスマートとはいえない、また自分たちとあまりみかけの変わらない日本人がやつて来た。そしてインドネシアを独立させる喜ばせてはくれたが、実質的には日本軍の支配下に苦しい生活をよぎなくされた日本占領時代があった。

そして今、今度こそ輝しい独立を自らの手でかちえたと思われた喜びも束の間に、経済的深刻な危機にみまわれて、独立は名のみで、なにもかも自分でやりた

インドネシアをのぞいたとき、私はもつと大きなショックを受け、これはなんとか早く手をうたないと大変だと思った。

それは陳列された商品がいかに貧弱だということ、その値段がいかに高いかということである。すなわち日本の戦争末期から終戦後にかけておこつたかのおそるべきインフレーションがインドネシアにおいて、現在現実に進行中である。特に問題なのはその原因と結果について一般大衆は十分に知識をもたず、政府はその対策について適確な対策をもたないということである。

まずその一例をあげてみよう。私のぞいたあるりっぱな洋品店の店さきにおかれたりショッキングなことで、それはその値段は日本のデパートの特売場で四〇〇円程度で買えるものが、四〇〇ルピアもする。當時米貨一弗が三六ルピアであったから、四〇〇ルピアということは四千円（一ルピア＝約一〇円）といふことである。私はまえもつてルピアの価値の下つていることは知つていたがこれほどであるとは思わなかつた。

しかし私はさらにおどろいのは、同行の人に、四〇〇ルピアというのが別に高



ジャワ南海岸ジョクジャ付近

くないのだとその理由を聞かせられたことである。インドネシアの通貨の公定交換率は米貨一弗四〇〇ルピアで、その一割もの手数料をインドネシア政府がとるので米貨一弗で三六ルピアにしかならないのは前述のことおりである。ところが市中のやみの交換率は米貨一弗二〇〇ルピアもしているという。

外貨のやみをやつた者には政府は極刑に近い懲罰方針でのぞんでいるにもかかわらず、市中では米貨一弗を得るため二〇〇ルピア以上も出す者がいるといふことは、いかに政府がなめられているか、あるいはいかに一弗三六ルピアのレートがあり高いのかどちらかである。おそらくその両方であろう。

一弗二〇〇ルピアならば四〇〇ルピアのワイシャツは七二〇円ということだけで高いとはいえない。したがつて一弗二〇〇ルピアというのが実勢レートに近いのである。

ところで外貨をもつていて米貨一弗二〇〇ルピアの割でルピアのやみ買いでできる外国人にとっては、このワイシャツはあまり高いといえないかもしねれないが、

九を無償で政府に没収されてしまったのとまったく同じことである。

インドネシアの政府はこれをインフレーションをとめる手段としてやつたのであるが、もう一つ重要な目的をもつていたことを否定できないであろう。それは華僑圧迫政策の一手段であったのである。御存知のようにインドネシアにおいてはこれまでどんな村落に行つても、その町の商権をぎつているのは華僑であつて、インドネシア商人はどういへば敵ではないかった。インドネシアは独立後長い間の苦闘の結果、ようやくオランダのあらゆる勢力を国外に追放することができた。しかし今や国内にねづよく残る華僑の勢力を排除しなければ、国家は政治的に独立しても経済的独立をかちえな

いことを知つたのである。

華僑を圧迫しインドネシア国民を保護する政策はこれまでいくつもとられた。たとえば商業上もつとも利益の多い外国商品の輸入を華僑の手からうばい、印度ネシアの民族資本よりもベンテン商社にのみ輸入権をあたえたり、地方の小村落における外国人の小売等を禁止したりした。しかし華僑はこれに対し、実力の

ないベンテン商社には金融して、その名儀をもち、実質的には依然、輸入業務を支配したし、地方の小売店はインドネシアの国籍を獲得した子弟の名儀をもつて依然商売を続けた。

今度の通貨措置ではさすがぬけめのない華僑も非常な打撃を受けた。五〇〇ルピア以上の高額紙幣を持っていたのは主として華僑であり、それが一時に一〇分の一しか価値がなくなり、しかも預金を九〇〇%封鎖されたのであるから、華商はその日から商品を仕入れる資金も、雇人に払う給料にも困つたのである。しかしこのようにおもいきった通貨政策も、華僑を一時的に困らせるに効果があつたが、その本来の目的であるインフレ防止策としてはまったく期待と逆の効果を生んだのである。

なるほど通貨を一〇分の一に切下げたのであるから、一時通貨の大幅な収縮を來たし、物価の暴騰を防いだが、一方一番たいせつな通貨に対する国民の信用をうしなつてしまつた。人びとはいつまた価値を失うかもしれない通貨を持とうとはしないで、財産ができるかぎり商品で持つとした。そして物資の大々的隠匿

正直な外国人や外貨などもたないインドネシア人にはこれではとても高く買えないものである。

聞くところによるとインドネシアの上級の役人でも月給は二千ルピア（公定レートで一万八千円）やみレートでわずか三千六百円）ということであるから、一般の人は月給全部投げ出してでもワイシャツ三と四枚しか買えないという勘定である。しかしワイシャツのような輸入品にくらべて食料などは比較的やすいようと思われた。われわれが街のあまり上等でない支那料理屋に行つて、五人程でたらふく食べた料理の代金が三〇〇ルピアであったから、一人前公定レートでも五〇〇円程、やみレートでは一〇〇円ちょっとである。

インドネシア産のみやげ物などはやみで換算すると気のどくなほど安い。たとえばインドネシア人の好きな鷺の堅木の彫刻は高さ一尺もありみごとなものがわずかに一五〇ルピア（やみレートで二七〇円）、日本でこんなものを作つたら一千円はするであろう。これをを作るにおそらく熟練した彫刻師が丸一日はかかるであろうが、店の小売値段が二七〇円である

では、材料費などひくとせいぜい一五〇円位の手間賃にしかならないであろう。これでどうして食べていいけるであろうか。

圧迫される華僑

インドネシア政府は昨年八月、きわめてドラスティックな通貨政策をとつた。おそらく世界の財政史上例のないむちやなものである。それは五〇〇ルピア以上の高額紙幣を政府の命令で一挙に十分の一、すなはち五〇〇ルピアは五〇〇ルピア、一千ルピアは一〇〇ルピアにしてしまつた。そのうえ銀行の預金を九〇〇%凍結し強制的に国債にふりかえさせたのである。これはいわゆるデノミネーションでもなければ平価切下げでもない。

デノミネーションならば、五〇〇ルピアは五〇〇ルピア、一千ルピアは一〇〇ルピアと、以後単に呼称を変えるだけであるから、外國為替交換率は一弗四〇〇ルピアが同時に一弗四〇〇ルピアとなり、四〇〇ルピアのワイシャツは同時に四〇〇ルピアとなつて、大額の通貨を所有している者でもすこしも損はないはずである。

平価切下げならばたとえば一弗四〇〇ルピアを以後一弗二〇〇ルピアとするよう

がはじまつて、インフレは反動的に拍車がかかけられた。

通貨改革をおこなった当時、二五〇億ルピアであった通貨は、一時一七〇億ルピアに収縮したが、わずか四ヵ月後にはふたたび改革前の数字を突破し、物価もまた暴騰に転じて、なんのために通貨改革をおこなつたのかわからなくなつた。

華僑は物資を隠匿するばかりでなく、もつとも隠匿に便利な外貨を買いあせつ

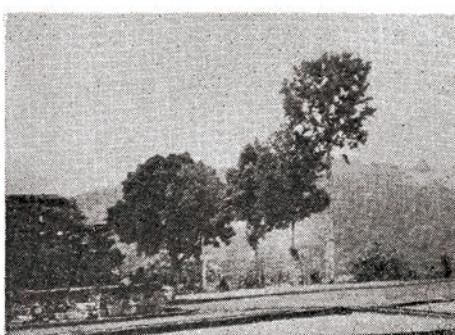
たのでルピアのやみ価格は暴落する一方である。こうしてインドネシア経済は混亂をつづけ取扱のめどもたたない状態になつたのである。

華僑処理の問題はインドネシアばかりでなく、東南アジアのどこでも戦後の經濟的独立と関連して大きな問題となりつ

あるが、インドネシアにおいては特にこの問題が重大化しつつあることは以上の通りである。

殊にインドネシアにおける華僑圧迫問題は、中共がこれをとりあげて、印度ネシア政府に強硬な申し入れをおこない、すでに国内問題にとどまらず重大な国際問題と化しつつある。

私には華僑問題は華僑の側にもまた華僑の住む国の政府側にも考えのならないところがあるようと思われる。華僑が私の利益のみはかり国家の政策に反し、これに協力しないかぎり、國權による圧迫を受けるのは当然のことである。しかし華僑が自分の永住しようとする国に対し協力をおしまないならば、能力のある華僑の力を利用する道はいくらでもあり、ただこれを圧迫し、追い出すことばかりが能ではないよう思われる。



マラビ火山の麓

と戦争によって独立した国はない。おそらく唯一の例外はベトナムだけである。したがつてインドネシアが他の国よりも民族意識が強く、排外的であることはある程度理解され、同情されるべきである。この過剰な民族意識や排外思想が政府の外交政策や経済政策をゆきすぎたものにしてはいるが、一方この強い民族意識へのめざめがインドネシアの今日の独立をもたらしたものである。これを手際よく調和させることは政治になれない若い印度ネシアの官吏ならずとも、非常にむずかしい問題であるにちがいない。

私はホテル・ドタ・インドネシアの悪口を書いたが、ホテル・ドタ・インドネシアがいかに荒廃しようともそれはオランダの過去の勢力の残骸にすぎない。それはまた過去のホテル・デス・インデスを知つている者の单なる感傷にすぎないと思われる。

事実私は街の中で、広い新しい土地がブルトーダーで地ならしされているのを見た。私がここに何ができるのかと聞いた、「ここに八階建の新しいホテルができるのです」という答えであった。それ私ははつと気がついた。すばらしい成

功を収めた東京のアジア・オリンピック大会の最後のシーンを思い出したからである。すでに日は落ちて暗闇になつた神宮の競技場に、それまで熱戦をくりひろげたアジア各国の若人が手に手にたい松を持つて行進し、会場から去つていった感激的シーンである。

会場のメイン・ボードには Ever Onward (限りなき前進) というオリンピックの標語の下に「インドネシアへ」と書かれてあつた。次のアジアオリンピック大会はインドネシアで開かれるのである。このアジア・オリンピックを目指してインドネシアはすばらしいホテルを建設しようとしている。このホテルの八百万ドルにものぼる巨額な建設費は日本の賠償金から出され、優れた日本の建設技術者の協力によって建てられているのである。このホテルこそ新しいインドネシアの新しい象徴の一つとなるであろう。

また私は町の一角に建つ映画館の看板を興味をもつて眺めた。上映されている映画は「ワニタ・インドネシア」(インドネシアの女性) というインドネシアの映画である。その絵看板になつてあるインドネシアの女性は昂然と空を見つめてい

私はインドネシアに入国するときの印象から、インドネシアの暗い悪い面のみ眼を向けすぎたようである。

一通り市内見物をすませて、再びホテルに帰り冷いものを飲みながら、落ついでもう一度インドネシアの印象を考えなおすと、インドネシアのよい面といふか新しいインドネシアのいぶきを感じたことも事実である。

現に私の部屋のベランダから本館のうえに掲げられたインドネシアの赤と白の国旗がほこり高くひるがえつてゐるのが見える。時代が変つたのだといえればそれまではあるが、よくも強力なオランダの支配から脱して独立をかちえたものである。現在のインドネシアの苦境に同情するとともに私はしみじみとインドネシア国民に祝福を送りたいような気もする。インドネシアの独立が他の東南アジア諸国と非常にちがう点は、インドネシアがはげしい独立戦争によつて、すなわち実力によつてその独立をかちえたということである。東南アジアの他の諸国で、インドネシアのようにこれまでの支配国

新しいインドネシア